

「強制執行あれこれ (れ)」→ レトロスペクティブ

近年、と言ってももうかなり前から、世間にはレトロという言葉が溢れかえっている。レトロ雑貨、レトロカフェ等々。このレトロとは、レトロスペクティブの略語である。懐古的と訳されるが、日本の場合多くは単に古い物を好むということではなく、大正期以降の建築や工業製品等のモダンデザインの魅力を再発見し、愛好することを言うように思う。伝統的な日本家屋で、伝統的な生活様式を守って住むことをレトロとは言わない。

レトロ団地という言葉もある。旧住宅公団や公社が供給した集合住宅団地のデザインや豊かな住環境に着目し、それらを活かしながら内部を大きくリフォームして住むということが、住まい選びの一つの選択肢として広く認識されるようになってきている。私自身は団地に住んだことがないが、子供時代、団地はとても身近でなじみのある生活環境であった。私は1970年に西宮市で生まれ、中学2年まで甲子園球場近くに住んでいた。祖父母と同居の三世代家族だったが、両親が共働きだったため、3歳から住宅公団の浜甲子園団地内の保育所に通っていた。

浜甲子園団地は昭和37年入居開始、31万㎡の土地に150棟4,613戸の住宅が建設され、1970年には人口約15,000人の大団地となっていた。保育所の周りには5階建て階段室型の住棟が建ち並び、東側に団地センターがあった。母は自転車ですを迎えに来て、この団地センターで買い物をして帰っていた。センター内の公民館では、保育所父母会の会合やバザーが開催され、私も広場で遊んだ思い出がある。大人も子供も生き生きと、この団地で生活していた。私が子供だった1970年代には、団地はまだ建設当初の輝きを保っていたように思う。しかしその後、入居世帯の世帯人員・構成の変化に伴い人口は減少し、経年化の課題も相まって再整備の対象となった。

これら集合住宅団地の築年数は古いもので60年前後、レトロ団地と呼ばれる団地のライフコースをたどると、建設された時には最先端の設備と最上級の安全性、居住性を備えた憧れの住まいだったものが、あっという間にその価値を失い見向きもされなくなり、それから魅力の

再発見がなされておしゃれな住まいとして認識されるという流れを見ることができる。60年は人間でいえば還暦、それほど長い時間ではない。たまたま価値を見出された団地は良いが、社会から価値が失ったとみなされ再整備の対象になり、ひっそりと息を引き取っていった団地もたくさんあるはずだ。上記の浜甲子園団地は平成7年から建替え検討が始まったとのことで、建設から33年では余命宣告をされたことになる。レトロともてはやされる団地がある一方で、人間の勝手な価値付けのために、寿命を全うせずに滅失した団地がある。建物寿命を何年とするかという問題はあるが、やはり今後は建てたからには寿命を全うさせることが重要である。

レトロという概念、古い物に新鮮な魅力を見出して愛好する行為が悪いというつもりはないが、経年化した建物の評価が「なつかしさ」「郷愁」という軸でのみ成立するのは、住まいとしてはあまり望ましくないことのように思われる。「なつかしさ」や「郷愁」が成立する過程には、まず価値の減退あるいは喪失のフェーズがあり、次に再発見のフェーズがある。住まいがその寿命期間中ずっと活用されるためには、この価値が減る期間を作るべきではない。それに一度状態が悪くなったものを元に戻すのは、非常にコストがかかる。一度古くなってから再発見されるのではなく、性能も見た目も一度も古くならない、ずっと現役、ずっと元気な建物が良い。

少なくとも住まいに関しては、「昔の物って味があっていいよね」というレトロスペクティブではなく、誰かの歌にあった「今の君が一番」の方が良いと思うのですが、いかがでしょうか。

(理事 山根聡子)

※今回のタイトルは、「ぶ」から始まることばです。



保育所園庭から団地住棟を望む
(浜甲子園団地、1975年頃)